1985年に期待こめて

職場からの声と決意

きびしい状況が私たちをとりまいていますが、きびしいとばかりは言っておれません。道をきり開き、確かな展望をもって労働運動に取り組むために、現場からの意見や感想を寄せていただきました。

命を守る保安確保と生活を守る労働条件向上のために
新しい年のたたかいに期待する仲間たち

本音の話し合いで

十五分会分会長　米村　稔

八四年をふり返ってみると、三池炭鉱では有明鉱坑内火災にはじまり、通勤電車廃止、四山・三川坑外職場の統廃合、四山鉱と有明鉱の災害など、重大災害が発生しまた減量合理化が強行された。

また、『行革』の名で勤労国民に犠牲を押しつける諸改悪が強行され、とくに健保本人一割負担に追いうちをかけるように、天領病院の特一類への移行が提案されるなど、盛り沢山の合理化のメニューを押しつけてきた一年であった。

さて、これに対応するわれわれの反撃の体制はどうかといえば、八四春闘にみられるように、ストなし、話し合いによる解決での低賃金、合理化の押しつけに対し、職場では不満がいっぱいあるが、これを具体的なたたかいに組織できず、ただ中央交渉まかせになっていたのではないだろうか。

合理化が強行される問題にしても、低額妥結にしても、精いっぱい悔いのないたたかいができたかどうかが、次のたたかいへの展望をきり開く分かれめだと反省している。

したがって、今年は「大衆闘争路線の推進」のために、五人組活動を重点においた〝本音の話し合いで団結の強化〟に取り組みたいと決意している。

そのためには、職場の日常の小さなことや、地域・家庭での悩みなど、なんでもざっくばらんに本音で話し合える組会議にしていくことが、一人ひとりの意見が全体のものとなり、諸闘争への大きな力になると考える。

人間らしく生きつづけ、働きつづけるために。小さな団結を大きな団結にするために。皆さんとともにいっそう努力し、頑張りたい。

労働者の側に立て

十四分会分会長　小柳康治

年の始めは、いつも〝今年こそは〟と決意を新たにするが、一年をふり返って見ると何のことはない旧態依然としている。

例えば「今年こそは満勤して、少しでも生活が潤おうように」、「車のガソリン代を節約してバイクを利用しよう」、「お酒も家でささやかに飲もう」と、考え方はいいが実行がともなわないでいる。今年は努力しなければと思っている。

坑内さがりも三十三年目になるが、炭鉱の災害は以前と少しも変わっていない。昨年一月の有明鉱大災害のように続発している。

会社がどんなに保安・安全を唱えても、結局は人員不足であり、だれが見ても明らかである。会社は人員を倍増し、四千人くらい採用してはどうだろう。現在のままでは一人ひとりの仕事量はおのずと限界があり、今後も災害はつづくであろう。

今年も春闘の準備に入っているが、今まで要求額があまりにも低いし、妥結額はまったく話しにならない。物価高の中で生活は急激に追い込まれている現状では、一方二千円ぐらいは要求すべきだと思う。

期末の一時金にしてもあまりにも低い額であった。よそではイスに座ってお茶を飲み、タバコを喫いながら五十万円はもらっているのである。過酷な地下労働であり、しかも危険な仕事である。

地下産業にふさわしいというのなら、倍額の百万円ぐらい要求するのが当り前である。それは無理だというのは、資本や会社のベースで物を考えるからではないだろうか。要求は労働者の側に立って考え、決めるべきである。

〝キネ〟ぶりを発揮

安全委員（港務）　平川道治

有明鉱、四山鉱の災害事故が続く中で、当然のように出炭は減り、港務所では少ない石炭をどのように混炭し、どう出荷するのか、やりくりに大変である。

「毎日二万トンぐらいの出炭があればなあ」といった声を、あちこちで聞くが、わかるような気もする。

しかし、労働者はもっと大変である。労務費を軽減するために一人で二役、三役の仕事を消化するのが、あたり前になってきた。

その上、安い賃金で、長時間の基準外労働をしなければ生活できないのが実態である。物価高、増税、福祉の切り捨て、医療費、われわれの出費はかさむ一方である。

二回のボーナスも、借金払いと家族の買物でパーである。将来のことを考えると貯金したい気持でいっぱいだが、それもままならず、自分の物は下着だけ。ほしい物は山ほどあるが、いつになったら買えるのやら。せめて五万円のベースアップ実現の初夢でも仲間ともに見たいものだ。

こんな毎日ではあるが、俺には沢山の仲間がいる。彼等は俺のことを「キネ、とっちゃん」と呼ぶ。俺は念のため「キネ」の意味を調べてみると、〝何かにつけ当たりちらすのたとえ〟と書いてあった。

俺は〝頑固者〟といわれているのだと都合よく解釈している。俺たちは何事もすぐ議論する。そして最後には決まって「あんたキネなぁ」である。彼等も相当のキネである。でも仲間は、ほんとうによいものである。

共に働き、苦しみ、喜びと悲しみを分かち合い、励まし合いながら過ごし、自分たちの生き甲斐を確かめ合っている。

今年も厳しい生活が待ち受けているだろうが、俺は仲間とともに働き、学び、大いに遊びたい。将棋、バイク、写真、麻雀、釣り、忙しいぞ。俺も四十五歳、ますますキネぶりを発揮して頑張ろう。

有明鉱で重大災害

抜本対策求め時限ストに突入

十二月十六日午前三時五十分ごろ、有明鉱（池田勤鉱長）三百二十メートル坑道第二上層西十五卸下部西一卸払の終端部（ゲート坑道）で落盤事故が起こり、鉄柱回収中の払採炭員燈中岩美さん（二十三歳）＝大牟田市新勝立町五丁目六の七（朝日ケ丘社宅七十九棟）が払跡からのバレ込み硬で生き埋めとなり罹災、死亡されました。

犠牲となられた燈中さんと遺族＝奥さんの真由美さん（二十二歳）と寿くん（一歳）の皆さんに心から哀悼の意をささげるとともに、生産第一主義、保安軽視の結果災害を続発させる会社に対し、強い怒りを込めて抗議します。

災害の現場は、坑道のほぼ全面（八×三×三メートル）にわたって大崩落しており

① なぜ大崩落が起こったのか。兆候はなかったのか。

② 終端部の立柱は規格通り実施されていたか。

③ 経験の浅い労働者を一人で作業させていたのはなぜか。

④ 断層との関係はどうか。対策はどうだったのか。

などが問題点です。

一月の有明鉱大災害以後、十月の有明鉱、十一月の四山鉱、そして今回の有明鉱と死亡災害が連続して発生、また災害につながるような事故も頻発しており、まさに三池炭鉱は『非常事態』です。

三池労組は、直ちに保安団交を申し入れるとともに、十七日早朝からビラを配布、十八日に時限ストライキに突入しました。

なお十六日は、異例の全山生産を止めての保安教育、点検・整備などの保安作業を実施しました。

悔いのない毎日を

二分会委員　古閑良男

去年の話で申し訳ないが、期末闘争のスト日のことです。

七時に目を覚まし床を出ると、外は快晴の秋空だった。

さわやかな秋空に比べ期末手当の会社の低額回答は、炭鉱労働者にふさわしいどころか、切実な要求を踏みにじるもので、気分のすぐれた朝ではなかった。

煙草を一服しながら小岱山をながめているうちに、気分転換に紅葉でも見に行こうかと思い立ち、妻を誘った。

あまり気乗りしない様子の妻をせきたてて「杖立に紅葉を見に行くぞ」というと、ちょっとその気になったのか、「前もって計画しとくとよかった」といいながら支度にかかった。

杖立は私たちの新婚旅行の地である。南関インターから高速にのり、久留米インターへ。

田主丸の柿園を横目で見ながら日田を通り下筌ダムに着いた。ここは『蜂ノ巣城』を拠点に権力に対してダム反対の熾烈なたたかいが行われたところである。

今は『蜂ノ巣城』も湖底に沈み、紅葉と杉木立を湖面に静かに映し出していた。記念写真を撮っていた私たちに、「小豆はいらんかいた」と、ダムの袂で小豆を売っているおばさんに声をかけられた。

田畑を取り上げられ、家を追われてわずかばかりの急斜面の畑を耕しつくられたであろうと思い、小豆と正月用にと黒豆を買った。

杖立は湯煙りを漂わせながら、変らぬただずまいをみせていた。阿蘇に向かい、熊本の娘の家に行く予定だったが、鯛生金山、地底博物館『神秘とロマンの里』という看板にひかれ、予定を変更して鯛生金山へ行くことにした。

明治二十七年以来昭和四十七年の閉山まで、東洋一の大金山として金四十トン、銀百六十トンを産出し、坑道も百十二キロメートルにも及んだという。

坑道に入るとひんやりとした中に、ノミと金づちを振るう男坑夫と、鉱石を入れるカゴを背負った女坑夫の人形を見ながら、私には過酷な労働と厳重な監視の中で働かされたであろう人たちのことを思い、ロマンどころではなく、複雑な思いにかられた。

金と石炭の違いはあっても、もうける奴と搾り取られる者はどこも同じだなと思いをはせる。

抵抗しては押しつぶされ、また抵抗しては押しつぶされながらもたたかい続けたであろうと思うと、俺はまだ現役ではないか。今日のたたかいを明日につなぐ、悔いのない一日一日を過ごさなければと思いながら帰路についた。

福岡県評が英炭労へカンパ

イギリスの全国炭鉱労働組合は石炭庁の二十坑閉山、二万人解雇に反対して三月からストライキに突入、政府の弾圧とたたかいながら九カ月を過ぎました。このほど三池労組の要請によって福岡県評は支援カンパを決定。すでに百万円を炭労を通じて送りました。

関東不知火会が三池労組へカンパ

さきに開かれた関東不知火会の定期総会でカンパが訴えられ、CO闘争支援としておくられました。ありがとうございました。